

## 第2回政策討論会の概要及び主な意見等について

### ○協議事項

- ・過去の市名検討及び今後の取り組みについて（市当局より説明）

### ○概要

資料に基づき説明

### ○主な意見等（Q：議員、A市当局）

Q：「市名検討に関する経緯資料の2の（7）市名に関する混同・誤解の状況調査」に関し、「今後の動向について4者で協議を行う予定（4月中）」とのことであるが、具体的にどのように進めるのか。

A：市名検討に係る要望書を提出された3団体より、「丹波篠山」名称の使用に係る混乱状況について、市で把握できる範囲において情報収集するよう依頼を受けており、その結果を報告することとなっている。

Q：平成25年11月に「篠山市」、「篠山市商工会」、「丹波ささやま農業協同組合」と「丹波篠山観光協会」の4者によって、丹波市に対し「丹波」呼称の使い分けに関する要望書が提出されたとのことであるが、提出以降に何か変化はあったのか。

A：変化はなかったのではないかと考えている。今回3団体が要望書を提出された背景には、そうした点もあるのではないかと感じている。

### ○協議事項

- ・「丹波篠山」使用の混乱状況について（丹波ささやま農業協同組合、篠山市商工会、丹波篠山観光協会より、意見聞き取り）

### ○概要

#### ■丹波ささやま農協

- ・名称としての「丹波篠山」は、「丹波地方の篠山」との意味であって、「丹波市」と「篠山市」の両者を指すものではない。

- ・「篠山」ブランドは、関西圏においては、それなりに知名度を有しているが、東京等で特産品のプロモーションを行った際、「篠山」を「しのやま」と誤読されたこともある。「丹波篠山」であれば、抜群の知名度から誤読も発生しないこと等、販売戦略上、重要な意義を持っている。

- ・「丹波篠山」の誤解の状況に関し、平成28年10月29日にNHKで放映された「誇りの一品ここにあり」において、「丹波篠山」の特産品が紹介されていたが、篠山の特産物に留まらず、丹波市山南町のすっぽんや春日町の小豆までもが紹介されていた。影響力の大きい全国ネットのテレビ放映において、誤解を与える紹介がなされている。

・当組合で取り扱っている黒枝豆の小袋に関し、県から原産地表示を「丹波篠山産」から「兵庫県篠山市産」に変更するよう指導があった。県によると、「丹波篠山産」では、産地が特定できないとのことであったが、このことも「丹波篠山」の誤解に係る事例のひとつであるといえる。

これらの誤解はあくまでも氷山の一角と考えている。これらに対し、何ら策を講じないならば、「丹波篠山」が「丹波市」と「篠山市」を指していると誤解する人がますます増加することになる。積極的な市名の検討をお願いする。

#### ■篠山市商工会

・氷上郡合併協議会における市名の協議において「丹波市」が有力候補として浮上してくる中、「丹波」に係る各種団体から連名で同協議会に対して、市名の再考を求める要望書を提出した経緯がある。その要望書の中で指摘していた憂うべき状況が現実になってきていると感じている。

・「丹波篠山」の誤解について調査する中で、最も衝撃を受けたのが、インターネット辞書による「霧芋」の説明である。その辞書によると、「霧芋」は、「兵庫県丹波市で生産されるヤマノイモ」、また「丹波篠山山の芋ともいう」と説明されている。

・個人のブログにおける「丹波篠山」の記事に丹波市の写真が写っている事例も見受けられる。

・平成31年に元号が代わる可能性もある中、元号と同時期に市名を変更することで、注目を浴びることが出来るのではないかと考える。

#### ■丹波篠山観光協会

・「丹波篠山」の誤解の状況に関し、観光客の方と接する中で「丹波篠山」であると思って訪れたところが「丹波市」であったとの声を聞くことがある。感覚的には、多ければ週に10件程度、少なくとも週に3件から5件はある中、実態としてはもっと多いのではないかと推察するところである。

・兵庫県の観光客入込数の動態調査によると、平成16年度の篠山市への観光客数は約319万7,000人である一方、丹波市は約193万8,000人と約1.6倍の差があるが、平成27年度の比較においては、約1.1倍になっている。この要因として、平成16年に丹波市が誕生したと結び付けることは難しいかもしれないが、無関係であるとも言切れない。なお、当該調査については、調査方法が変更されており、観光客数の実態をどれほど正確に掴んでいるかは留意する必要があるが、いずれにしても比較軸を持っているという意味において、有用な数字であると考ええる。

・「地域ブランド総合研究所」の2015年全国自治体認知度ランキングによると、篠山市は597位、丹波市は312位となっている。また、魅力度ランキングにおいては、篠山市

は439位、丹波市は310位となっている。この背景には、「丹波」のブランド力が働いているのではないかと推察するところである。

・観光雑誌「じゃらん」のリサーチセンターが2016年に行った調査によると、「篠山」を知っていると答えた人は全国で25%であったが、阪急交通社が11,000人を対象に行った調査においては、「丹波篠山」を知っていると答えた人は、80%にのぼった。このことは、「丹波篠山」の知名度の高さが伺える結果となっている。

・特産物等の産地表示については、意図せず誤解を招いた表示と意図的に誤解を招いている表示の2つが考えられるが、丹波市産の黒枝豆を丹波篠山産と表示する等、後者の表示と思われるものも存在している。また、丹波市内にあるイタリアンレストランのインスタグラムをみると、投稿のタグ付けが「丹波篠山」でなされている。

・インターネットグルメサイトの「Retty (レッティ)」において、「丹波篠山」のランチTOP20を検索すると、丹波市のお店が7軒含まれている。また、「食べログ」において「丹波篠山」を検索すると60軒のお店が該当するが、その内30軒は三田市内の店であり、丹波市が9軒、篠山市が12軒となっている。

・篠山市内の小学生の中には、「丹波篠山」は「丹波市」と「篠山市」を指す言葉であると誤解しているものもいると聞く等、誤解の根深さに驚かされる。

・丹波篠山市への変更は、自治体イメージや知名度の向上等、移住を促す効果が期待されることから人口増対策のひとつとしても有効であると考ええる。

○主な意見等 (Q: 議員、A 各団体)

Q: 篠山市の知名度について、施政方針によると「篠山市の知名度は向上している」とされている中、各団体の方々はどのように感じているのか。

A: 篠山市は、日本遺産に認定されたことやユネスコ創造都市ネットワーク加盟など、対外的な発信力を備えた自治体になっていると考えるが、それをみても、「丹波篠山」ではじまっていること等から、純粋に「篠山市」の知名度が上がっているとは言い切れないと考える。

Q: 篠山市内における観光客数の推移について、施政方針によると2015年度の観光客数は約180万人であり、以降、増加傾向にあるとされている中、説明のあった「県の観光客入込数動態調査」の結果をどのように考えていけばよいのか。

A: 観光客数については、徐々に増えていると感じているが、商工関係者の利益に結びついていないことが問題であると考ええる。

A: 県の調査結果については、調査方法に留意する必要があることは説明の中でも申し上げたとおりである。篠山市の観光客は微増微減の繰り返しであるが、丹波市の観光客数は増加している点は見逃してはいけないと考える。

Q：「丹波篠山」の混乱状況について、「丹波篠山市」に変更すれば収束すると考えているのか。

A：混乱状況を収めるために市名を変更するのではなく、篠山市の利益を逸しないために市名を変更する必要があると考えている。

Q：黒枝豆の小袋に係る原産地表示について、丹波篠山ブランドを冠している他の特産品に対して県の指導はなかったのか。

A：あくまでも原産地表示についての指導であり、丹波篠山ブランドの使用に関する指導ではない。

Q：各団体の要望書を拝見する中、丹波ささやま農協については、市名を「変更する」よう求めるものである一方で、篠山市商工会及び丹波篠山観光協会については、市名の変更を「検討する」よう求めるものであると理解している。しかしながら、本日、各団体の意見を伺ったところ、全ての団体において、市名の変更を「求める」ものであると理解するが、どうか。

A：篠山市商工会の要望書内容については、指摘のとおり市名変更を検討するよう求めるものである。要望書を作成した際には、直接的に変更するよう求めるものではなく、変更を検討するよう求めるといった間接的な表現を用いたが、作成以降、様々な誤解の状況を調査する中で、改めて問題の根深さを認識したことから、市名を変更するよう求める意見を述べるに至ったと理解いただきたい。

・丹波篠山観光協会も同様である。

Q：既に「丹波ささやま農協」として経済活動等を行っている中、市名を「丹波篠山市」に変更することにより、特産物の販売等が向上すると想定しているのか。

A：認知度の向上等、効果はあると考えている。